

犬のことにになると、 正解がわからない



仕事では決めてきた。
それでも、愛犬のことに正解はなかった。

須田淑子

はじめに

犬と暮らしていると、予定どおりにいかないことが増えませんか？

1日の予定だけではありません。働く場所も、使う時間も、お金の優先順位も変わります。昨日まで安全だったものが、今日は危険になることもあります。

そして、病気や介護に直面すると、専門家の説明を聞いても、何を選べばよいのか分からない日があります。

私は長い間、仕事で複雑な状況を整理し、人や組織が前へ進むための判断をしてきました。それなのに犬たちのことになると、驚くほど合理的ではられません。

チャックを実家の犬にされるかもしれないと勝手に焦り、両親と一緒にウィリーを迎えたことがあります。犬と一緒にいたくて始めたアルバイトは、交通費で稼ぎがほとんど消えました。仕事では大きな組織を扱ってきたのに、家では犬たちに自分の膝の席をどう分けるかということすら、予定どおりにできません。

ばかだなあ、この人。

そう思いながら読んでもらえたら、たぶん正解です。

ただ、犬との暮らしには、笑って済ませられない時間もあります。

この本には、私と犬たちが暮らしてきた時間と、その暮らしによって仕事の形まで変えてきた経緯を書きます。立派な飼い主の成功談ではありません。迷ったこと、間違えたと思ったこと、今も答えが分からないことを含んだ、私たちの現在までの話です。

もし今、愛犬のために何かを決めなければならず、情報を集めるほど頭の中が散らかっているなら、この本を読み終えた時に、「相談する内容がまとまっていなくても、誰かに話していい」と思ってもらえたらうれしいです。



犬たちとの暮らしが、私の毎日をつくってきました

目次

- 1 午前2時の片づけと、週末の自由が丘
- 2 チャックを取られる、と思った
- 3 1頭飼いか、多頭飼いか
- 4 それぞれ、言い分がある
- 5 犬のために働き、仕事のために待たせる
- 6 あと5年は生きると思っていた
- 7 完全リモートへ
- 8 ソフィーの目が飛び出した夜
- 9 摘出がよい、と決めるまで
- 10 介護は、一筋縄ではいかない
- 11 優しさが、危険に変わることもある
- 12 持っているものを、全部ここへ

おわりに

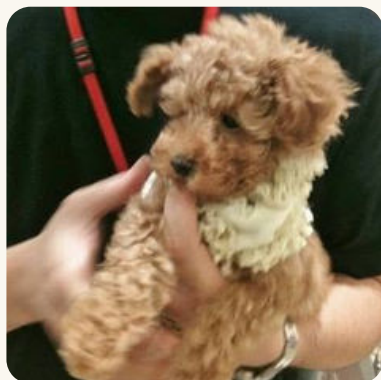
1 午前2時の片づけと、週末の自由が丘

チャックを迎えた頃、私は外資系IT企業で働いていました。

朝7時頃に家を出て、帰宅は深夜2時頃。動きたい盛りのチャックは、その長い時間を狭いケージの中で過ごしていました。

ある日帰宅すると、暴れ回った形跡がありました。トイレも水も敷物も、何もかもがひっちゃかめっちゃかです。いつもは狭いケージの中で我慢していたチャックが、ついに限界を迎えたように見えました。私も1日働いて疲れ切っていましたが、それでも黙って片づけるしかありませんでした。

チャックを1人にして働かなければ生活は成り立たない。けれど、働けば働くほど、チャックを1人にする時間が長くなる。



私が最初に迎えた犬、チャック

その会社で働き続けることを当たり前だと思っていた私にとって、チャックを1人にしてまで、この生活を続けるべきなのかと考えるきっかけになった出来事でした。

土日のどちらかには、チャックと自由が丘のペットショップへ行きました。洋服を選んで試着し、おもちゃで店員さんに遊んでもらう。チャックにとっても私にとっても、心からほっとできる時間でした。

こうして店へ通ううちに、チャックは洋服が好きな犬になっていきました。

なぜ好きになったのかは、本人に聞けないので分かりません。店員さんに遊んでもらえるからかもしれない。店へ向かう私の弾んだ気持ちを読んでいたのかもしれない。試着するたびに「可愛い」と褒めてもらうのが、まんざらでもなかったのかもしれませんが。

後に私は会社を辞め、ペットに関する事業を始める準備を進めました。さまざまな経験を積み、つながりも作りたいと考え、自由になった時間で、チャックやソフィーを連れてその店でアルバイトまでしました。

交通費を払うと、稼いだお金がほとんど残らないようなアルバイトです。経済合理性だけで評価すれば、だいぶ弱い企画でした。

それでも、ペットや飼い主さんの役に立てることがうれしかった。犬たちと一緒にいられる働き方が、私には必要でした。

犬との暮らしに仕事を合わせる。今につながる発想は、この頃から始まっていたのかもしれませんが。

大好きだったペットショップで、
遊んでもらうチャック



2 チャックを取られる、と思った

チャックを連れて実家へ帰ると、あまり動物に興味がないと思っていた両親が、チャックをととても気に入ったようでした。

私の仕事が忙しいことは、家族もよく知っています。

「それではチャックに十分な世話ができないのでは」と指摘されることは、容易に予想できました。

そこから私は、勝手に発想を膨らませました。

そのうち、「チャックは実家の子にした方がいい」と言われるかもしれない。

まだ誰にもそんなことは言われていません。それでも私は、それが現実になる前に何かしなければ、と焦りました。

一方で、犬と暮らすことは、両親にとってもよいのではないかと考えていました。家に犬がいれば会話のきっかけが増え、毎日の生活にもよい刺激が生まれます。

実家に取られるかもしれない
そんな心配までしていた頃のチャック



そこで両親に犬との暮らしを提案し、一緒に実家近くの店へ行って、ウィリーを選びました。しつけは私がするという前提で、私が購入して両親へ贈りました。

ウィリーはしばらく私の家で暮らし、私がしつけをした後、実家の犬になりました。この経験は、私自身にとってもしつけの実践的な練習になり、後にペットシッターだけでなくトレーナーとして働くことにもつながりました。

ウィリーを迎える話は現実になりましたが、発端となった「チャックを実家の子にされるかもしれない」は、最後まで私の頭の中だけの話でした。

誰にも言われていない未来を先回りし、犬を1頭迎えるところまで実行する。少々やりすぎですが、心配したまま立ち止まるより、動いてしまうのが私でした。



実家の家族になった、ウィリー

3 1頭飼いか、多頭飼いか

仕事のことで悶々としていた頃、私は昼休みに癒やされたくて、お台場のペットショップへ行きました。当時の職場から、いちばん近いペットショップでした。

そこで出会ったのが、ソフィーです。

とても小さくて、可愛い犬でした。けれど、その場ですぐに迎えることはできませんでした。

ソフィーを迎えれば、初めての多頭飼いになります。勢いだけで決めてよいことではないと思いました。

2週間後に改めて来て、それでもまだこの子がいたら、その時に考えよう。

可愛いから、きっとすぐに新しい家族が決まるだろう。そう思って、その日は店を後にしました。

2週間後、私は昼休みに再び店へ行きました。

ソフィーは、まだそこにいました。



小さな小さな、ソフィー

だからといって、「運命だ」とその場で決めたわけではありません。考えなければならないことは、まだたくさんありました。

チャックと相性よく暮らせるのか。チャックの世話を続けながら、この小さな命にも最後まで責任を持てるのか。仕事をしながら、2頭に必要な時間と環境を用意できるのか。

一方で、長い時間を1人で留守番しているチャックに、よい相棒ができるかもしれないとも考えました。

昼休みの勢いで決めることはせず、仕事中ではない時に、今度はチャックも連れて改めて店へ行きました。店でソフィーと対面させ、一応、互いの様子を見ました。

もちろん、その場で少し会わせてただけで、本当の相性が分かるはずありません。それでも、何も確かめずに決めるよりはよいと思ったのです。

そうしてようやく、ソフィーを迎えることを決めました。



可愛いけど気が強いソフィー

寒い時期でしたが、ソフィーは着られる服が見つからないほど小さな犬でした。そこで私は、余っていた毛糸で腹巻きを作りました。

小さな犬を迎える覚悟については2週間考えましたが、寒さ対策の答えは、お手製の腹巻きでした。

若い頃のソフィーは自己主張が強く、快適な場所を見つけるのが誰よりも上手でした。ふかふかのベッドが好きで、家の中でいちばん気持ちのよい場所を、いつの間にか自分の場所にしていました。



ソフィー、はじめての腹巻き

4 それぞれ、言い分がある

犬たちは、性格も、主張の仕方も違います。

アダムは、病院で診察や注射を受ける時、まだ何もされていないうちから、いかにも大変な被害を受けたような顔をします。一方で、家では誰かと身体をくっつけていたい甘ったれ犬です。

チャックが小さなベッドで寝ていると、その上に乗ってでも一緒に寝ようとしてました。チャックは明らかに嫌そうな顔をしながら、それでも怒らずに受け入れました。

チャックには、お気に入りの洋服がいくつかありました。チャックには小さくなった服を、お下がりとしてアダムに着せることもあったのですが、それが気に入らないように見えました。

いつの間にか、チャックはどこかからその服を持ってきて、自分のベッドの中に確保していました。そして、服を力いっぱいくわえ、こちらを見ながら「うー」と言うのです。



これは僕の！
と主張するチャック

もう着られなくても、自分のものは自分のもの。その点について、チャックの主張はかなり明確でした。

ライラは、ペットショップと連携している動物病院で水頭症と診断されました。ペットショップからは、生涯にわたり薬が必要になると説明され、生体価格を付けられず里親募集になっていました。

短い命かもしれない。それなら、うちでほかの犬たちと遊び、幸せな時間を過ごしてほしい。そう思って迎えました。

迎えた後、かかりつけの獣医師へ相談し、薬をやめて経過を見ることになりました。その後、ライラは驚くほど元気に育ちました。長い間、家でいちばん運動神経のいい犬でした。

それでもやはり、緊張や興奮が強い時にはてんかんのように見える発作を起こしたこともあります。そんな時は動画を撮り、かかりつけの獣医師に見てもらいます。



左から、ソフィー、アダム、チャック、ライラ

個性はばらばらでも、いつも自然に一緒にです

ミラは家へ来た翌日から、リビングでひとり大運動会を始めました。

周囲のベッドで休んでいた成犬たちは、目を丸くして見ていました。それまで運動神経1位だったライラを、到着翌日に軽々と抜いたように見えました。

よく食べ、自分の要求も伝えにきます。特に「おなかすいた」は非常に分かりやすい。

これはミラに限りません。犬は話せないと言いますが、一緒に暮らしていると、それぞれが何を主張しているのかは、だいたい分かるようになります。

もちろん、突発的な症状や身体の異変は別です。そんな時には、分からないことを分かったつもりにはしないことも必要です。

普段の主張は分かっても、病気や痛みの答えまでは聞き取れません。だからこそ、観察したことと、分からないことは分けて考える必要がありますね。



元気印の末っ子、ミラ

5 犬のために働き、仕事のために待たせる

最初の会社を辞めた理由は1つではありません。

チャックを長時間1人で留守番させることが可哀そうだったこと。家族の事情もあり、自宅でできる仕事を考える必要があったこと。いくつもの事情が重なっていました。

2013年、私はARFを始めました。当時は大きな使命を掲げていたわけではありません。チャックとソフィーを社員にすればいい、くらいの感覚でした。実際、ウェブサイトには2頭をスタッフ犬として載せていました。

その後、私を取り巻く状況が少しずつ落ち着きました。その頃一緒に暮らしていた犬たちはみんな元気で、日常的な介護や特別なお世話を必要とせず、留守番もできました。そこで私は、再び外で働くようになりました。

仕事では、複雑な状況を整理し、計画を作り、人や組織が自分たちで前へ進めるよう支援してきました。正解を一方的に示すのではなく、相手の本音を聞き、隣に立って考える。責任を背負う人を1人にしないことを大切にしてきました。

仕事は好きでした。責任もありました。犬たちに必要な医療や快適な生活を我慢させず、私自身も普通に暮らしていくために、きちんと収入を得ることも必要でした。

けれど、その仕事のために犬たちとの時間を失い、十分に世話ができないなら、何のために働いているのか分からなくなります。

その後、私は会社員として再び大きな責任を担うようになりました。2017年から働いた会社はハードワークでしたが、リモート勤務も併用できました。2025年に移った会社では、原則として出社が求められました。

チャックの具合が悪くなった時期には、リモート勤務を認めてもらっていました。

その頃には、シニアになった犬たちと過ごす時間を確保するため、My Treasury ARFを復活させる計画を始めていました。

犬たちのために働きたい。けれど、働くほど一緒にいる時間が減っていく。その矛盾は、チャックを迎えた頃から形を変えながら、ずっと残っていました。

6 あと5年は生きると思っていた

チャックは15歳になってから、心臓が悪いと言われ、薬を飲んでいました。

時々、おじいちゃんのような咳をしました。それでも、私にはまだ元気に見えました。チャックはしっかりしているし、あと5年は生きる。私は本気でそう思っていました。

仕事をしている間、チャックには長い留守番をたくさんさせてきました。5年とは言わずとも、まだ一緒に過ごせる時間は残っていると信じていました。そしてその時間でチャックとたくさん遊びたい。チャックが喜ぶことをたくさんしてあげたい、と思っていました。

亡くなる数日前、チャックは具合が悪そうにしていました。病院では腰痛と説明され、腰の周辺を温める処置を受けました。けれど私には、いつものチャックとは違って見えました。

翌日は休診日でした。その翌日、チャックは食えず、何度も吐き、ぐったりしました。再び病院へ連れて行くと、重度の黄疸だと説明されました。

点滴のため、1泊入院を勧められました。夜間は誰もいないと聞き、私はいったん「連れて帰ります」と言いました。チャックを1人にしたくありませんでした。それでも説明を受け、最終的には預けました。

その夜、私は一睡もできませんでした。

翌朝、病院から電話がありました。

チャックが亡くなったという連絡でした。

私は「迎えに行きます」と答えました。

病院へ迎えに行き、亡くなったチャックをカートに乗せて帰る時、私がどんな気持ちだったか、想像できるでしょうか。

私は、あの夜の判断を何度も何度も悔やみました。一緒にいられなかったこと。チャックを1人で逝かせてしまったこと。それは、後悔してもしきれものではありませんでした。

チャックのそばにいたかった。ただ一緒にいたかった。それでも私は、1人でカートを押して帰るしかありませんでした。

連れて帰っていたら助かった、とは思っていません。

連れて帰っていても、チャックは亡くなっていたと思います。

それでも、最期に一緒にいられたかどうかは、私にとってとても重い違いだったのです。



亡くなる4日前のチャック

7 完全リモートへ

チャックが亡くなったから、My Treasury ARFを思いついたわけではありません。

犬たちとの時間を増やすため、事業を復活させる計画は、その前から始めていました。

ただ、チャックの死で、私は完全に心を決めました。

通勤を前提にした働き方をやめる。ソフィーの介護に打ち込む。犬たちと一緒にいられる形で仕事をする。

お世話が必要なシニア犬と暮らし、完全リモートで働く必要がある。そうなれば、出社を前提とする会社を辞めることに、私の中で躊躇はありませんでした。

退職を申し出ました。しかし会社は私を引き留めてくれ、退職はすぐには実現しませんでした。交渉の結果、私はフルリモートで仕事を続けることになったのです。

介護の時間を確保するという点では、必要だった働き方を勝ち得たことになります。一方で、原則として全員が出社する会社で、自分だけが特別扱いを受けながら働くことには、ずっと違和感がありました。

それに、私が本当に動かしたかったのは、再び立ち上げようとしていたARFです。私はその後も、会社を辞めたいと申し出続けました。

チャックが苦しんでいた時、私は専門家の説明に違和感を持ちながら、自分が本当に望んでいた選択を通せませんでした。仕事では何十年も、1人で考え、1人で決めてきた私でもです。

後になって、誰かが少し一緒に整理してくれていたら、結果を変えるためではなく、自分が大切にしていたことを選べたかもしれないと思うようになりました。

この経験が、My Treasury ARFで考えていた支援とつながっていると気づいたのは、その少し後のことでした。

8 ソフィーの目が飛び出した夜

ソフィーには、チャックが亡くなる前から、認知症と徘徊がありました。そうした症状が顕著になってから半年ほどたった頃、眼球脱出が起きました。

6月22日、未明3時30分。

ソフィーの叫び声で目を覚ましました。何かと起き上がり、電気をつけると、眼球が飛び出して出血していました。私はその状況に息をのみました。

小さな身体の全身から悲鳴が出ているように、ソフィーは叫び続けていました。私はソフィーを抱え、夜間救急へ電話しました。

最初につながった病院からは、対応できないと言われました。別の病院へ電話しましたが、今度はつながりません。私はパニックになりながら何度もかけ直し、5回目ようやくつながりました。

後から、病院が多忙で電話を制限していたと知りました。事情はあるのでしょう。それでも、目から血を流し、全身で悲鳴を上げる犬を抱えている側からすれば、「それはないよ」と思いました。

ようやく病院へ着いても、忙しいためすぐには対応できないと言われました。一方で、「15万円から20万円かかるが大丈夫か」という費用の確認は、当たり前のようにありました。

寝起きの部屋着にソフィーの血をつけ、かなり動揺していた私は、こんな時によく費用の話ができるな、と思いました。同時に、それも確認しなければならない世界なのだと、どこかでは分かっていました。

けれど、あの場で私に「お願いします」以外の選択肢があったとは思えません。目の前でソフィーが叫び続ける中、1人で治療、費用、次の行動を決めなければなりませんでした。

せめて横に、「ひどいよね」と言える相手がいたら違ったと思います。

夜間救急では、飛び出した眼球を戻し、縫合する処置が行われました。その時の私は、説明を受けて「そうですか」と従うしかありませんでした。なぜ眼球を戻して縫合する判断だったのか、理由がよく分からないと思うようになったのは、その後のことです。

9 摘出がよい、と決めるまで

同じ6月22日、かかりつけの動物病院へ相談し、ペット眼科を紹介してもらいました。翌23日には、その眼科を受診しました。

その後も何度か通い、6月30日、夜間救急で縫合した部分を眼科で抜糸してもらいました。その眼は、もう機能していないとのことでした。

2種類の目薬を処方されました。1つは1日20回、ほぼ1時間ごと。もう1つは1日6回、3時間ごとにさすという指示でした。

私はすでに睡眠時間を削ってソフィーの世話をしていました。仕事をしながら、1人でこの点眼を続けるのは、かなり厳しい内容でした。医学的に必要な指示だったのかもしれませんが、ただ、1人の飼い主が毎日実行できるかという点では、私には現実的とは思えませんでした。

しかも、眼はもう機能していないと言われています。これ続けることで、ソフィーにどんなよいことがあるのか。私には意味が分かりませんでした。

ソフィーに痛みがあったのかは分かりません。けれど、機能していない異常な状態の眼があることで、かなりの不快感があるように見えました。とてもつらそうでした。

かかりつけの獣医師や、ほかの知り合いの獣医師にも相談しました。摘出した方がよいのではないか、という意見でした。

7月11日、私はほぼ摘出を決めていました。ただ、この眼科で手術を受けることは選びませんでした。かかりつけ医へ相談し、高度医療センターを紹介してもらいました。

ソフィーの体調が戻るなら、摘出しよう。

そう決めました。

7月15日に入院し、16日に手術を受けました。術後に面会し、18日に退院しました。

手術前には、高度医療センターから50万円から60万円ほどかかると説明を受けました。苦しんでいる犬を前に、治療方針と費用と、自分の生活で続けられるケアを、同時に決めなければならない。それが飼い主にのしかかる現実です。

10 介護は、一筋縄ではいかない

ソフィーが退院した翌日の7月19日、今度はライラが腰痛で病院を受診しました。

7月24日、腰の痛みで騒ぐライラを病院へ連れて行こうと急いでいた私は、足をひねりました。少し痛みはありましたが、そのままライラを連れ、片道15分の動物病院まで歩いて往復しました。

翌朝いちばんで自分の病院へ行き、MRIを撮ると、骨折していることが分かりました。その場でギプスを巻かれ、人生で初めて松葉杖を使うことになりました。

けれど、松葉杖をうまく使えません。移動するたびに、今度は上半身や手首まで痛くなりました。

そんな中でも、7月28日にはソフィーの摘出手術後の抜糸がありました。本来は高度医療センターで受ける予定でしたが、骨折で車を運転できないため、かかりつけ医で対応してもらえよう調整しました。



弱り目に祟り目な状況

かかりつけ医が抜糸を引き受けてくれたことは、本当にありがたいことでした。

普段なら歩いて行く病院ですが、この日はタクシーを使いました。道路の都合で遠回りになり、往復で4,000円近く。抜糸そのものより、病院へ行くための費用の方が高くなりました。足が動かなくても、ソフィーの抜糸は待ってくれません。

ソフィーの手術が終われば落ち着く、とはなりませんでした。ソフィーが退院するとライラが痛がり、ライラを病院へ連れて行こうとして私の足が折れ、その足でソフィーを抜糸へ連れて行く。介護は、一筋縄ではいきません。

抜糸が終わると、ソフィーはわりとすぐに、元気よく徘徊し始めました。

徘徊そのものは、認知症によるものです。それでも、その時の私には「ソフィーの元気が戻った」と分かる動きでした。

摘出してよかった。

私は、その姿を見て確信しました。

11 優しさが、危険に変わることもある

今のソフィーは1.1キログラムです。認知症と徘徊があり、視力もほとんど残っていません。

フードも水も、口元まで持っていかなければ認識できません。私は数時間おきに水を飲ませています。長時間家を空ける時は、動物病院へ預ける必要があります。

それでも、口元へフードを持っていくと、がつつ食べます。満身創痍の小さな身体で食べる姿は、たくましくて、可愛くて、若い頃とはまた違う愛おしさがあります。

認知症による徘徊への対策として、ソフィーにはサークルを使っています。そのサークルの中で、最近、事故が起きました。

元気だった頃、ソフィーはふかふかのベッドが好きでした。誰よりも快適な居場所を見つける天才でした。

徘徊して疲れ、サークルの薄い底で眠るソフィーを、少しでも快適にしたい。そう思って、毛足のある丸形の絨毯を敷いていました。

ある日帰宅すると、ぐるぐると同じ場所を回るソフィーの足の爪に、絨毯の毛が何重にも絡まっていました。

細い脚を傷つけないように、私は約30分かけ、絨毯を少しずつはさみで切りました。

足が絨毯から離れた直後、疲れ切ったソフィーはぐったりしていました。脚は折り畳まれたような状態で、動いていませんでした。

ソフィーは徘徊する時、何かに取りつかれたように、走るような勢いで同じ場所をぐるぐると回ります。その勢いのまま、足だけを突然引っ張られて動けなくなり、ジタバタしながらパニックになったのではないか。そう想像すると、恐ろしくなりました。

ソフィーが起きたら、この脚を病院で診てもらわなければならないかもしれない。そう考えて、私は翌日の予定を調整していました。

けれど翌朝、ソフィーはしっかり歩いていました。その姿を見て、私はようやく少しほっとしました。

ふかふかが好きだったソフィーのために敷いたものが、ソフィーを苦しめました。

あの時の感覚は、「心臓をもぎ取られて、また突っ込まれた感じ」です。

介護では、昨日までよかったものが、今日も安全とは限りません。愛情からしたことなら間違わない、という保証也没有ありません。

だから、様子を見て、変化に気づき、また直す。その繰り返しです。



ソフィーが快適に過ごせるようにと絨毯を敷いたサークル

12 持っているものを、全部ここへ

私は今、ARFとMy Treasury ARFを再び動かしています。

飼い主として、犬との暮らしや介護を経験してきました。同時に、長い会社員生活の中で、複雑な課題を整理し、人と組織を動かしてきました。1,000人を超えるコンサルタントが所属する組織の責任者や執行役員として、自分自身も大きな責任を負ってきました。

犬のケア、シニア犬の介護、グリーフケア、アニマルコミュニケーション。事業を動かすための仕組みやAI。必要だと思ったことには、時間も費用も、少し多いのではと言われるくらい投入してしまいます。

犬と一緒にいたくて、交通費で稼ぎがほとんど消えるアルバイトをする。チャックが実家の犬になってしまうと勝手に焦り、両親に犬との暮らしを提案する。自分1人の会社を再び動かすために、学び、仕組みを作り、働き方まで変える。

ばかだなぁと思います。でも、半端にやるより、この方が私らしいのだと思います。

チャックが大変だった時、私に必要だったのは、代わりに決めてくれる人ではありません。

私が感じていた違和感と、チャックと一緒にいたいという気持ちを、いったん受け止め、状況と選択肢を一緒に整理してくれる人でした。

それがあれば結果が変わった、とは言えません。連れて帰っていたとしても、チャックは亡くなっていたかもしれせん。

ただ、最後の時間をどう過ごすかという、私自身の選び方は変わったかもしれません。

My Treasury ARFの復活準備は、チャックが亡くなる前から進めていました。そこへ、あの時の私に必要なだった支援を重ねました。

獣医師から治療の選択肢を示されたけれど、何を基準に選べばよいのか分からない。

愛犬の介護と仕事を両立してきたけれど、そろそろ限界かもしれない。

治療費やこれから必要になるお金のことが不安なのに、誰にも言いにくい。

そんな時、必要なのは、誰かに結論を言い渡されることではないと私は考えています。

My Treasury ARFは、愛犬について判断が必要になった時に、犬の状態、専門家から聞いたこと、費用、仕事や家族の事情、そして飼い主自身が大切にしたいことを一緒に整理し、自分で選べるよう支えるサービスです。

獣医療の代わりではありません。飼い主に正解を言い渡す場所でもありません。

相談、継続的な伴走、喪失後のグリーフケア。訪問、お散歩、お預かりといった日々のお世話。形は違っても、飼い主が自分の生活を守りながら、犬に必要なケアを続けるための支援です。

まだ相談するほどか分からない段階でも使える診断や整理ツール、日々の変化を記録する仕組みも用意しています。判断が必要になってから慌てて記憶をたどるのではなく、普段から小さな変化を残しておくためです。

犬と暮らす人の現場で本当に使える支援にするために、状況を整理し、必要な仕組みを作る。そのための手段としてAIも使っています。

飼い主として積み重ねてきた経験と、責任ある立場で培った、複雑な状況を整理して実行へ移す力。その両方を、ARFとMy Treasury ARFの仕事に注いでいます。

おわりに

犬と暮らしていると、昨日までのやり方が、今日も正しいとは限りません。

年齢や体調が変われば、必要な世話も変わります。仕事や家族の事情、お金のこと、専門家の意見、そして自分の気持ち。どれも無視できないまま、選ばなければならない時があります。

私も、そのたびに迷ってきました。十分に考えたつもりでも後悔し、よかれと思ったものが危険に変わり、骨折している場合ではない時に限って骨折しました。

それでも、犬たちの様子を見て、考え、必要ならやり方を変える。その繰り返しで暮らしを続け、ARFとMy Treasury ARFを作っています。

これからも私は、犬との暮らしと仕事の現場を歩き来しながら、必要だと思った支援を、実際に使える形にしていきます。少しやりすぎるくらいが、たぶん私にはちょうどよいのだと思います。

ARFとMy Treasury ARFがこれから何を形にしていくのか、時々のもてもらえたらうれしいです。

そして、愛犬のことで何をどう考えればよいのか分からなくなった時は、My Treasury ARFの案内を見てください。

相談する内容が、まだまとまっていなくても構いません。

まとまらない時に、一緒に整理するための場所だからです。

マッサージでうとうと。お世話中の猫ちゃんもZzz



著者紹介

須田淑子

外資系IT企業を含む長い会社員生活の中で、複雑な課題の整理、人と組織の支援、1,000人を超えるコンサルタント組織の責任者、執行役員などを経験。

2013年にARFを設立。現在は、犬との暮らし、介護、仕事、家族、お金などが重なる場面で、飼い主が自分の大切にしたいことを整理し、自分で選べるよう支えるMy Treasury ARFを運営している。



サービス案内

My Treasury ARF

愛犬について判断が必要になった時に、犬の状態、専門家から聞いたこと、費用、仕事や家族の事情、そして飼い主自身が大切にしたいことを一緒に整理します。

獣医療の代わりではありません。飼い主に正解を言い渡す場所でもありません。

相談する内容が、まだまとまっていなくても構いません。

まとまらない時に、一緒に整理するための場所だからです。

<https://mytreasuryarf.com/>

こちらも、よろしければ。

1

3分でできる お悩み診断 (無料・登録不要)

mytreasuryarf.com ▶ タップで開きます

2

無料相談 (15分・初回限定)

mytreasuryarf.com/#contact ▶ タップで開きます

3

LINE公式アカウント

ID : @255ildik

スマートフォンのカメラでQRコードを読み取るか、ここを
タップすると友だち追加の画面が開きます。



書名：『犬のことになると、正解がわからない』

著者：須田淑子

発行：My Treasury ARF (ARF株式会社)

発行日：2026年9月 初版

URL：<https://mytreasuryarf.com/>

© 2026 Yoshiko Suda

本書の体験・想いはすべて著者自身のものです。表紙写真の加工と、著者紹介の似顔絵イラストの作成にAIを使用しました。内容はすべて著者が確認しています。本書は著者の体験に基づくもので、獣医療上の判断に代わるものではありません。個別の判断は、かかりつけの動物病院にご相談ください。

犬のことになると、 正解がわからない

犬との暮らしで、何をどう考えればよいのか
わからなくなった時に。

My Treasury ARF
<https://mytreasuryarf.com/>

著者 須田淑子